

糖尿病診療に“家族”という視点を

—第3回プライマリ・ケア医に必要な家族アプローチワークショップ

竹中 裕昭

2003年2月11日、名古屋大学医学部鶴友会館にて「第3回プライマリ・ケア医に必要な家族アプローチワークショップ」が開催された¹⁾。

家族に接することは臨床医であれば誰でも行うことである。しかしながらその接し方については“基本的臨床技能”として取り上げられることがほとんどない。そのため本ワークショップは、臨床医として基本的な家族との接し方を身につける機会を提供すると共に、生活習慣病や在宅医療において家族の協力をいかに得ていくか、また患者さんを抱える家族のケアをどのように行っていくかを検討する場として設けられた。

さて今回お話ししたいのは、その3回目のワークショップにおいて、「糖尿病診療マスター」創刊準備号に掲載された山本壽一先生の「糖尿病の夫婦—コントロールを分け隔てたものは何か」という論文²⁾を、症例検討に取り上げさせていただいたことである。

同症例は、糖尿病の夫婦が入院により病状が軽快するも、夫の父の死や母との同居というライフイベントを契機に妻の血糖コントロールだけが乱れるというケースである。

同症例を選んだのは Procheska の行動変容モデル (Transtheoretical model of change)³⁾、東大式エゴグラム (TEG) や PAID といった質問紙法を用いた心身医学的アプローチ、そして同じイベントを経験しても妻のみ血糖コントロールが乱れるという context の重要性といった全人的医療のエッセンスを含んだ興味深いアプローチが紹介されていたからである。

実際のケースでは夫の母へのアプローチは行わ



ロールプレイを用いた家族面接シミュレーションの様子

れず、夫婦一緒に入院することが選択されているのだが、ワークショップでは「もしこの症例に家族面接を行うとどうなるか」についてシミュレートしてみた(写真)。

シミュレーションであるため結論を得るのは難しかったが、少なくとも“家族”を考慮することで違った視点が得られることを参加者には体験していただけたと思われる。

このように心身両面からアプローチしても、コントロールが困難なケースに対しては、リソースとしての“家族”を意識することが一つの方法であろう。

皆様には実際に家族面接を行わないまでも、「家族」という視点を持って診療されることをお勧めしたい。M

文 献

- 1) <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/general/index.html>
- 2) 山本壽一(2002) 糖尿病の夫婦：コントロールを分け隔てたものは何か。糖尿病診療マスター創刊準備号：23-28
- 3) Procheska JO(1979) Systems of psychotherapy: A transtheoretical analysis. Dorsey Press, Homewood, Illinois

たけなか ひろあき

竹中医院

(〒556-0006 大阪市浪速区日本橋東3丁目16-19)

名古屋大学医学部附属病院総合診療部